

『藪の中』論考

溝口貞彦

A Consideration on the Controversy about Akutagawa's "Yabu no naka"

SADAHIKO MIZOGUCHI

1. 『藪の中』についての論争と研究

芥川龍之介の名作『藪の中』(1922年)は2度よみがえった。1度目は黒澤明監督の映画『羅生門』において。2度目は最近の論争において。

『藪の中』をめぐる最近の論争は、1970年中村光夫によって口火を切られ、それを福田恒存が反駁し、さらに大岡昇平が二人を批判するという形で進行した。それに関する論文は、次のものである。

(1)中村光夫の「『藪の中』から」、『すばる』創刊号、1970年6月。(のち中村は「私信—再び『藪の中』をめぐる」、『すばる』1971年8月を書いて、福田に反論した)。

(2)福田恒存「『藪の中』について」、『文学界』1970年10月。(福田は「フィクションといふ事」、『文学界』'70年11月でも再論している)。

(3)大岡昇平「芥川龍之介を弁護する」、『中央公論』1970年12月臨時増刊。

〈注〉とくに福田恒存は以前から芥川龍之介に関する優れた評論を発表していた(「芥川龍之介について」、『文学』1941年8月、「芥川龍之介の比喩的方法について」、『新潮』1941年8月)。なかでも、「芥川龍之介論」、『近代文学』1946年4月(のち福田編『芥川龍之介研究』1957年、新潮社に収め

る)は、漸新な観点をうち出して注目された。

三者の論争以後、『藪の中』への関心が高まり、最近までに次のような20編をこえる論文が発表された。

a. 鶴田欣也「芥川の『藪の中』と真相さがし」、『芥川文学』1972年6月。

b. 柄谷行人「芥川龍之介における現代—『藪の中』をめぐる」、『国文学』'72年6月。

c. 安田保雄「芥川龍之介—『袈裟と盛遠』から『藪の中』へ」、『国文学』'72年9月。

d. 高田端穂「『藪の中』論考」、『成城国文学論集』'73年9月。

e. 海老井英次「『藪の中』原典の作家の主体」、『北九州大学文学部紀要』'74年2月。

f. 笠井秋生「『藪の中』私考—3つの陳述の信憑性をめぐって」、『評言と構想』'79年3月。

g. メアリ・アルトハウス「『藪の中』論争の検討」、『津田塾大学紀要』'82年3月。

h. 佐藤嗣男「芥川龍之介『藪の中』—真相再構成論への訣別」、『表現研究』'84年9月、など。

これらのうちでも感心したのはgの論文で、論争の要点をよくつかみ、外人とは思えないほど流暢な日本語で論旨を展開してあった。

2. 論争点

(1) 作品のテーマ

『藪の中』論争における一つの争点は、この作品のテーマは何かということであった。

中村光夫は多襄丸の証言のうちに「この作品の最も重要なテーマ」が提起されている、「それは強制された性交によっても女性は相手の男に惹きつけられることがあるということ」だという。

福田恒存はそれを的はずれである（「私は初めてこの作品を読んだ時以来、それが主題だとは一度も思った事が無い」）として、この作品のテーマは、「事実あるいは真相というものは、第三者の目にはついに解らないものだといふ事だ」と説く。

大岡昇平は2人に対して（とりわけ福田に対してきびしく）批判している。まず「芥川の意図は福田のいうように『真相はわからない』というような観念的なものではない」といって、福田の所説を一蹴する。次に「『藪の中』には、多くのテーマが含まれている」、すなわち中村のあげたテーマのほかに、「サジズム、のぞき見、露出狂など、ポルノグラフィックな要素の複合体として捉えなければ」ならない、という。つまり「これは一人の女を争う2人の男、三角関係と呼ばれる男女間の永遠の葛藤をテーマとしており、夫の目の前で強姦する場面は、その劇的な集中として構想されたのではないか」という。

私は、中村や大岡の主張はまったく見当りがいと考えるのであるが、それについては後に検討することにしよう。

(2) 作品における事実問題

主要な登場人物3人のうち、誰の証言が最も信頼できるか、そして武弘を殺したのは誰かという事実問題に関しても、論者の見解は分かれている。

中村は多襄丸に、福田は（3人とも疑わしいというが）実質上真砂に、大岡ははっきりと武弘に、信を置いている。

例えば中村は、多襄丸を西洋的な「紳士的

盗賊」と特徴づけ、その主張が最もすじが通っているとみなす。しかし福田は次のように多襄丸を告発する。「対等の太刀打ちをした事、しかも23合も斬り結んだというのは、多襄丸の嘘であろう。」「金沢の武弘がそれほどの使い手だったなら、どうして易々木の根方に縛り付けられたか」「私が検非違使だったら、先ずその辺から自白の切り崩しに掛るだろう。」

真砂は途中2度失心したと証言しているため、最も嘘っぽいとみられ、最も激しく批判・攻撃されている。例えば大岡は、「竹の枯葉を頬ばらされて口の利けない夫の口の動きを『殺せ』といったと察した、と真砂はいう。しかしこれは人の生命にかかわることである。まず竹の葉の枯葉を取ってやって、はっきりした返事を聞くべきはいうまでもない」「あとで自分も死のうと思った、というのも、こんな場合、誰でもいうことである。ただこの場合はごまかすことが出来ないのは、自分でも喉をついたというのなら、その傷が残っていなければならないということである」。

中村や福田、大岡は現代日本の代表的な評論家・作家であるが、これらの批評を読んで感ずることは、彼らが文学者的立場からでなく、検察官（ないし検非違使）的立場から登場人物の言動を論難していることである。

武弘に対しては、福田はその証言が最も非現実的で最も信じにくいという。それに対して大岡は猛然と反論しているが、それに関してはもはや詳しくは述べない。

結局、多襄丸、真砂、武弘という3人の当事者のうち、誰の証言が最も信頼できるか、そして武弘を殺害したのは誰かという事実問題に関しては、芥川の本文はもちろん、中村・福田・大岡3人の論争を通じて決め手はなく、結着はついていないといわざるをえない。

3. 作品における事実問題についての考察

(1) 武弘を殺害したのは誰か

駒尺喜美は「この小説の特徴は……どのよ

うな点から考察しても真相の解けぬ点にこそある」という。これは作品の事実問題について述べられたものであるが、①誰が武弘を殺したか、②真砂は多襄丸に何といったのか、「あの人を殺してください」といったのかどうか、③誰が最初に現場を立ち去ったか等の事実問題に関して、3人の証言がいちじるしく食い違っており、真実を確定することが困難である。

ここでは、「誰が武弘を殺害したか」の一点にしぼって、事実問題を考察していくことにしよう。誰が殺害したかというような、事件の核心となる問題について、最後まで解決が与えられていない。そのことはこの小説が通常の推理小説と異っていることを示している。しかしそれだからこそなおさら、この点に関して大きな関心をもたれてきたのであった。

論争が水かけ論に陥らないためには、3人の当事者のうちどの証言が客観的状況と合致しているかによって判定するほかはない。当事者以外の第三者によって述べられている状況としては、次のことがあげられる。

その第一は、「草や竹の落ち葉は一面に踏み荒されておりましたから、きっとあの男は殺される前に、余程手痛い働きでも致したのに違いございません」と木こりが述べていることである。これは真砂や武弘が述べている状況とはほど遠い。多襄丸の証言（決闘殺人）を裏づけるものと考えられる。

第二は、致命傷となった武弘の胸の傷である。木こりは「死骸は仰向けに倒れておりました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございます」とだけ述べている（この部分の証言は簡単すぎる）。

多襄丸は大刀で突いて武弘を倒したと述べ、真砂と武弘は小刀で刺したと述べている。「一刀」の「突き傷」というのは、小刀ではなく、（多襄丸のいうように）大刀による突き傷をさしていると考えられる。

さらに武弘のいうように、自分で小刀で胸を刺したときは、仰向けではなく、うつ伏せに倒れるはずである。（これは妻真砂が小刀で

刺したとしても同様である）。木こりのいうように「死骸は仰向けに倒れ」ていたとすれば、それは大刀で強い勢いで突き倒したためと考えられる。それも多襄丸の証言を裏づけるものであろう。

当事者以外の証言にある状況証拠はこれだけである。そこで以上から武弘を殺害したのはだれかを判定するとすれば、それは多襄丸である。武弘は多襄丸との決闘に敗れ、大刀で胸を貫かれて殺された、というほかはない。

(2) 『藪の中』の心象風景

多襄丸のいう決闘殺人が最も確からしいとすれば、真砂の自分が夫を刺殺したという証言や武弘の自ら刺した（自殺）という証言はどうか。それらは心理においてだけの真実、すなわち心象風景（ないし幻）と考えるほかはない。

福田は3人の証言をすべて心象風景と考えているが、それではこの物語が成立しない。しかし一部はたしかに心象風景であったと思われる。その一つは、真砂の2回の失心に挟まる部分である。大岡も「この2つの失心に挟まる部分が最も信じにくい陳述となっている」と述べているが、それは幻想を述べた部分だからである。一度目の失心は幻想の開始を告げるものであり、二度目の失心はその終りを告げるものである。すなわち2回の失心は、幻想のカギカッコを示すものである。

だとすれば、2つの失心に挟まる部分で真砂は「自分が夫を刺した」と語っているのであるが、それは真砂の心象風景ないし幻であったといわなければならない。

多襄丸の証言が非常に現実的であるのに対し、真砂の証言は半ば現実的で半ば幻想的である。さらに武弘の死霊はいつそう主観的（もっと正確に言えば夢遊病的）である。「幻のように、そういう景色を眺めていた」というが、武弘の話全体が幻想的である。福田は「結論を言へば、多襄丸、女、男と話が進むに随って、その信憑性は薄くなってゐる」という。事実問題についていえば、私はこの観点に賛成である。武弘の話全体が幻想的であり、彼

の自殺という陳述も、幻想であったとみなさざるをえない。

武弘の殺害について、多襄丸の述べているところが客観的状況と合致した事実であり、真砂や武弘の述べている部分は幻想であった——そう解釈したとき、3つの証言を整合的にとらえることができる。

(3) 真砂は武弘殺害に責任を負わないか

事実からみれば、武弘を殺害したのは多襄丸であって、真砂でも武弘自身でもなかった。では、真砂や武弘自身は、武弘殺害に責を負わないのかという問題が残る。

ここで留意すべきことは、男は2人とも自己の意志が不明確ないし稀薄であるのに対し、真砂が最も意志が明確なことである。多襄丸ははじめ「男を殺すつもりはなかった」、しかし女が「どちらかが死んでくれ」というのを聞き、女に心を動かし、決闘をしたという。また武弘は、女の「あの人を殺してください」ということばに衝撃を受け、縄を切られたのち、生きぬく方をではなく、自害する方を選んだという。どちらも女のことばをその通り実行したか、もしくはそれと同じ結果となっている。

真砂は「ではお命を頂かせてください」といって夫を刺したと、明確に証言している。その意味では真砂は最も主体的である。

それは幻（心象風景）であるにしても、夫も自分も地上より抹殺し、自分の恥ずべき記録を抹消してしまおうとする、真砂の本心が表われている。フロイト心理学で下意識が夢のなかに現われるというが、まさにそのように、失心中の幻のうちに真砂の本心が吐露されたのである。

真砂が武弘を殺し、自分も死のうとしたことは、疑いない。しかし真砂が武弘の死を欲したとしても、意図だけでそれが行動に現れない場合は、有罪とはされないのではないか。たしかに法律上はそうであろうが、それをいわば政治的に問題にするときには、見方が違ってくる。誰の意志が貫徹しているかということが、キーとなる。

そのことを明確ならしめるために、ここでクラウゼヴィッツの有名なことばを引用しよう。「戦争は他の手段をもってする政治の継続にほかならない。」

多襄丸の証言を問題にする論者は、決闘（すなわち「戦争」）だけを見て、それが背後の精神的抗争（すなわち「政治」）の転化したものだとはみていない。

引裂かれた夫と妻は、激しく心理的に闘っていた。その心理的抗争は、多襄丸と武弘の闘いに転化する。多襄丸は恋の虜となり、どちらかが死ぬのが彼女の意思だと受けとめる。そして真砂にかわって、彼女の「夫を殺す」という役割を引き受ける。武弘が倒れることにより、真砂の意志は実現する。

真砂が武弘の死を欲し、それを多襄丸が実行するという構図である。そのいみでは、武弘の殺害はもともと妻真砂の意思によるものであった。だから真砂は夫武弘の殺害に責を負っているといわなければならない。

(4) 武弘は自己の死（殺害）に責を負うか

『藪の中』の一連の事件に、武弘の性格的弱さが関係していることはたしかである。彼の弱さは、次のような点に表われている。

彼は強者である多襄丸に対して怒りを向けていない。「おれはこの言葉だけでも盗人の罪は赦してやりたい」といって、その暴力的侵入者に対し許しと信頼を与えている。他方、弱者である妻に怒りを向け、妻が多襄丸に蹴倒されるのを小気味よげに眺めている。窮状に陥って助け合うべき同志の妻に対しては、不信と怒りをぶちまけて、自らの精神的孤立を深める。それでは精神的に敗北・自滅するしかない。

さらに武弘が縄を解かれても、生きぬく方ではなく、自害する方を選んだといっているのは、彼の性格的弱さ、生きぬく意志の弱さを象徴的に表現している。性格的弱さと精神的自滅——それこそが武弘の死を導く内的要因であった。

芥川は「運命は偶然よりも必然である。『運命は性格の中にある』と云ふ言葉は決して等

閑に生れたものではない」という。その観点からすれば、武弘の運命（死）は彼自身の性格によって規定されたものであった。

これを哲学的に言えば、次のようになるであろう。弁証法では、決定的なのは外因ではなく、内因である。外因は条件であり、内因（内部の矛盾）が物事の真の原因である。そして外的条件は内部の矛盾を通じて作用する、と教える。

盗賊多襄丸の出現は夫婦にとっては外的条件である。また武弘の死においては、多襄丸だけではなく、真砂さえも外的条件である。武弘が多襄丸と闘って敗れるのは外形である。また真砂の意志ないし裏切りによって敗れるのも、結果である。それらの前に、武弘自身の性格的、意志的弱さがあり、それによって彼は内的精神的に、敗北・自滅したのである。その意味で、武弘自身、自己の死（殺害）に責任を有しているといわなければならない。

(5) 武弘殺害の重層的原因

一つの死—武弘の殺害は、一つの原因によるのではない。多襄丸は外的原因をなし、真砂は意志的原因をなし、武弘自身は内的性格的原因をなしている。それぞれが武弘の死に対して責任を負っている。そして多襄丸、真砂、武弘と話がすすむにつれて、外部から内部に目が向けられるようになっていく。すなわちこの作品では、一つの武弘の死（殺害）が一つの原因によるのではなく、重層的な（三重の）原因を有することが説かれているのである。

このような見方は芥川の意向にそうものであるだろうか。彼は遺稿『或旧友へ送る手記』で次のように述べている。

「君は新聞の三面記事などに生活難とか、病苦とか……いろいろの自殺の動機を発見するであろう。しかしそれは動機の全部ではない、自殺もまた「我々の行為」と同様に、「複雑な動機を含んでいる。」

これを『藪の中』の武弘の死にあてはめて考えてみれば、³一つの原因ではなく、前記のような重層的把握こそが、芥川の意図に即し

たものであることがわかるのである。

4. 作品のテーマについての考察

(1) 芥川の連作におけるモチーフ

中村や大岡は『藪の中』に出てくる強姦の場面だけを一面的にとりあげ、そこにテーマを求めている。そのとらえ方は現象的で、精神的な深みがない。またとらえ方が一面的部分的で、『藪の中』を芥川の一連の作品の中に位置づけて考察していない。

周知のように『藪の中』は、芥川が『今昔物語集』から取材した作品の一つであるが、これと同じ系列に属するものに、『羅生門』、『鼻』、『芋粥』、『偷盗』、『地獄変』などがある。なかでもとくに『羅生門』と『偷盗』、『藪の中』の3篇は、登場人物や内容などの点で関連が深い。

『羅生門』の主人公である下人は、『偷盗』では交野ノ平六として登場する。そこで『偷盗』は『羅生門』の続篇とみなされている。また『偷盗』に現れる多襄丸が、『藪の中』の主な登場人物の一人となっている。中国の連環小説のように主人公は次々と変っていくが、まさにそのことによって、物語が次々と展開していくのである。

『羅生門』『偷盗』『藪の中』という連作において、物語の内容は変化していくが、その底に芥川が一貫して追求した思想が流れている。それは極限状況における人間存在のあり方、換言すれば、極限状況においてこそ最も鮮明に表われると考えられる人間のエゴイズムの問題であった。

(2) 『羅生門』におけるエゴイズム

芥川文学のモチーフは、処女作である『羅生門』においてすでに明確に表現されていた。そこでは蛇を魚といつわって売る女、その女の死後、その髪の毛を抜いて蔓に編んで売る老婆、その老婆の着物を剥ぐ下人という、悪しき連関が描かれている。なかんずく下人に焦点をあて、失業して窮迫し、飢え死にするか盗人になるか迷った末、生きていくためやむをえず引剥ぎとなる下人の心理を克明に追

っている。芥川はそこで極限状況に生きる人間存在を問題にしたのである。悪を犯さなければ（または他の人を犠牲にしなければ）生きていけないというのが、人間のもって生まれた宿命であると彼はみたのである。吉田精一はそれを「生きんがために各人各様に持たざるをえないエゴイズムをあばいているもの」と評している²⁾。

芥川の基本的モチーフは、このようにエゴイズムの解明にあった。

(3) 『偷盗』におけるエゴイズム

多くの論者はエゴイズムの否定面のみを見、それを醜悪なものとして非難する。しかし芥川は人間のエゴイズムをそのように一面的に見ていたのではなかった。彼はエゴイズムを積極面と消極面との両面からとらえていた。そのことは次のようなことばにも示されている。「僕は社会に対してエゴイストです。そしてその主張の中に、強みも弱みもあると思っています。その弱みと云ふのは個人の孤立といふ事で、強みと云ふのは個人の自由といふ事です」（山本喜誉司宛書簡）。

〈注〉芥川は自らを「エゴイスト」と規定し、そこから自ら「我鬼」（エゴのこと）と号し、自己の書齋を「我鬼窟」と称していた。

芥川におけるエゴイズムの消極面は、生きるためには他を犠牲にせざるをえないということであり、それは文学上では『羅生門』に描かれた世界である。その積極面は、エゴイズムが生発の発現であるということであり、それは『偷盗』で描かれた世界である。

『偷盗』では、盗賊団というアウトローの社会が描かれている。それは、乱れた性関係、抗争、野盗、敵への通報など、通常の倫理からはずれた反道徳の世界である。しかしそこには『羅生門』のような暗さはない。反道徳の世界をそれなりに肯定し、たくましく生きる男や女を通じて、「生の発現」がうたわれている。「道徳を蹂躪する」（『侏儒の言葉』）自由な生き方こそ、芥川の理想であった。

思うに、アウトローの世界に自由な生き方があると考えるのは、やくざの世界に男の生き方の美学があると考えるのと同じ位、虚妄であろう。芥川は盗賊団の中に人間の原生的で自由な生き方を求めたが、それは結局「皆畜生」の世界にいづかざるをえないのである。

(4) 『藪の中』の多襄丸にみるエゴイズム

私たちは、『偷盗』における「生の発現」たるエゴイズムと「皆畜生」の世界をひきずり、体現している者として、多襄丸をとらえることができる。多襄丸はまことにたくましいが、彼は（殺人、強盗、強姦など）他人を損うことなしには生きていくことができない。

彼はむしろ開きなおって、次のように自分を裁く者を批判する。「あなた方は大刀は使わない。唯権力で殺す、金で殺す、どうかするとお為ごかしの言葉だけで殺すでしょう。」——あなた方はこの裁判であたかも正義が悪を裁くような形式で私を裁いている。しかしあなた方も、他を犠牲にして生きている点では私と同類である、いや地位の高い権力者ほど他を損うことも大きいというのである。ここに『羅生門』以来の芥川の基本的モチーフが再び現れている。他を損うことなしには生きていくことができないという、エゴイズムの問題である。

(5) 真砂にみるエゴイズム

多くの論者は、真砂に対してだけはエゴイズムをかぎとっている。

「二夫に見えずの貞操観から出たようであり、その根底には、自分の生活の不快をとりぞくために、他人の生命を奪うことを辞さない、本能的なエゴイズムをかくして」いる（中村光夫）。「いずれにしても夫を小刀で突き刺した加害者の行為は女のエゴイズムからであった」（久保田芳太郎）³⁾、など。

しかし「女のエゴイズム」などといって、エゴイズムが女性特有のものであるかのごとく、真砂だけを批判してもはじまらないと思う。人間すべて本質的にエゴイズムをもつというのが芥川の思想であり、真砂もその

一つの形象として描かれているのだから。

もし真砂のエゴイズムを問題にするなら、多襄丸のエゴイズムとの関連でとりあげるべきである。『羅生門』の下人と老婆に表現されたエゴイズムの連関構造が、『藪の中』では多襄丸と真砂の関連において表現されている。

多襄丸のエゴイズムは、まず真砂に対象化される(強姦という形で)。女は多襄丸に対しては被害者であるが、武弘に対しては加害者として振まっている。そこには最近の中学生の“いじめ”と同じような、犠牲転化がみられる。そして最も弱い者は(武弘のように)葬られていく。弱者はわけもなく、ただ弱者であるという理由で、犠牲にされていくのである。

(6) 武弘におけるエゴイズム

私たちは、『偷盗』と『羅生門』において、エゴイズムの正の側面(「生の発現」)と負の側面(「他を犠牲とする」)が描かれており、それが『藪の中』で、多襄丸と真砂において再現されているのを見る。しかしそれだけではまだエゴイズムの精神的な中核に触れていないように思われる。

エゴイズムの自覚は近代個人主義の核心であった(ここで芥川は、古典に題材をとりながらも、きわめて近代的な個人精神をテーマとしている)。それは精神的には、他から切離された孤立した思索、ないし孤独な魂を意味する。(芥川がエゴイストの弱みとして、「個人の孤立」をあげているとおりである)。その孤独な魂の形象こそは、武弘でなくてはならない。

芥川によれば、孤独を癒してくれるものは愛(とりわけ肉親の愛)であった。『偷盗』では、「皆畜生」の世界と肉親の情とを対置し、最後に争闘に明け暮れる盗賊団(相争うエゴの形象)の中へ「兄弟愛」をもちこんで団円としている。それは甘い、まだ救いがあった。

しかし『藪の中』においては、もはやそのような結末はえられない。人間の自然的愛情(夫婦間の愛)さえも、エゴイズムによって

破壊されてしまうことが描かれている。(エゴイズムの貫徹、一そして孤独性の徹底)。

愛に代わる憩いの場所として、目の前にあるのは「死」だけである。孤独な魂は死して静寂の中に包まれる。それは芥川のいう「孤独地獄」の形象である。

しかし芥川は、死さえもその実、憩いの場ではないと悟らざるをえなかった。芥川は、我が分身である武弘が、死後「中有の闇」の中で、悶え、苦しみ、のたうっているのを見る。真に、もはやどこにも救いはない。(そこに自殺を目前にした作者芥川の心理的苦悶を読みとることが可能であろう)。

(7) エゴイズムの重層的構成

これまで作品のテーマに関して述べてきたことを要約すると、次のようになる。

- ①それは、『羅生門』—『偷盗』—『藪の中』という一連の連作の問題としてとらえなければならない。それらの基底にあるのは、エゴイズムの問題である。
- ②『藪の中』におけるエゴイズムは、単に真砂だけの問題ではなく、多襄丸—真砂—武弘間のエゴイズムの抗争と、犠牲転化の構造のなかでとらえなければならない。
- ③エゴイズムもけっして一義的なものではなく、少なくとも三つの意義(ないし色彩)を帯びている。その積極面(「生の発現」)は主として多襄丸によって代表される。その消極面(「他への犠牲転化」)は真砂によって代表される。そしてその精神面(「孤独な、さまよえる魂」)は武弘によって表現されている。

以上から、『藪の中』はエゴイズムの重層的構成をえがいたものといえることができる。

<注>

- 1) 駒尺喜美「芥川龍之介『藪の中』」、『解釈と鑑賞』1969年4月。
- 2) 吉田精一『芥川龍之介』1942年、三省堂。
- 3) 久保田芳太郎『『藪の中』』、菊地・久保田編『芥川龍之介研究』1981年、明治書院。